

【論文】

近似的なカナ表記の工夫に関する一考察  
—幕末の英学書『洋學指針 英學部』の発音表記を中心に—

藤 上 隆 治\*

A Study of Features of English Phonetic Transcript in “Katakana” Letters  
—How *Yogaku Shishin Eigakubu*, published in 1867, Approximates  
English Pronunciations in “Katakana” Letters—

FUJIKAMI, Ryuji

要旨：文字では正確に発音を表記できない上に、英語は綴りどおりに必ずしも発音しない言語の一つである。従って、コミュニケーション上、カナであれ発音記号であれ、英語を読ませる工夫が必要である。これを本稿の立脚点とし、本稿では幕末・明治初期の英学書における英語の発音表記に関する研究の一環として、1867（慶応3）年に出版された『洋學指針 英學部』に見られるカナ表記の工夫を探った。その結果、『洋學指針 英學部』では、カナで英語音を表すことには無理があるという見解を示しながらも、wineを「ウヰイン」というように[w]をカナ2文字で表すなどの工夫が見られた。

キーワード：柳河春三 『洋學指針 英學部』 英語 発音  
カナ表記 文字 綴り

1. はじめに

本稿は、英語発音のカナ表記に関する藤上（2014a）をはじめとする諸研究の一環として、幕末・明治初期の英学書に見られるカナ表記の工夫を

---

\*ふじかみ りゅうじ 文教大学文学部外国語学科

探るものである。

インターネットの発達によって、容易に英語の発音を聞くことができる現代だが、英語は必ずしも文字どおりに発音しない言語の一つであることは今も幕末期も変わらない。たとえば、oneには[w]を示す文字はないが、[wʌn]と発音する。そのため、発音記号の助けが必要になる。発音記号の中でもIPA（The International Phonetic Alphabet：国際音声字母）は、各国や各地域の言語の発音を表記できる記号であり、英語の発音指導にもIPAを使用することに利点はあると考える。

一方、IPAは便利であるが、綴りを覚えるのに精一杯な学習者にとっては、IPAまで覚えるのは負担増である（島岡1997：62、小菅2003：85-86、手島2011：39など）。むしろ、外国語として英語を学んでいる日本語母話者が身につけている日本語音との共通性を見出し、それを補助手段として有効に活用するのは決してデメリットではないと考える。母語音と対照することに言及している文献はすでに明治時代にある（八杉1901：45）。

そこで、カタカナ表記を使用する場合に、どういった表記上の工夫があるのかを調査する。そのために、本稿では、カナ表記に関する先行研究を概観し、調査対象文献として、幕末の洋学者で「我邦に於ける雑誌の創始者」（尾佐竹1940：2）と言われる柳河春三（やながわ しゅんさん）が1867（慶応3）年に出版した英学書『洋學指針 英學部』を取り上げる。この文献の選定理由は2つある。1つは、幕末、随一の洋学者<sup>1)</sup>である柳河春三は語学に堪能であり、出版等を通じて英語の必要性を知っていると考えられるからである。たとえば、柳河春三は、1862（文久2）年、「我国最初の英和辞典」（斎藤2017：159）と言われている堀達之助の『英和對譯袖珍辭書』の編纂に携わり、1863（文久3）年、*The Japan Commercial News*を翻訳し、『日本貿易新聞』と題して1865（慶応元）年まで107号発行した。

もう1つの理由は、『洋學指針 英學部』が綴りと発音を主とした英学書であり（竹村1933：164）、「数多く刊行される通俗英語学習書の一つの

源となっているという意味で、明治の英学を評価する上からも是非一見しておくにたる資料」(杉本1985:222)との指摘があるからである<sup>2)</sup>。

## 2. 『洋學指針 英學部』の書誌

『洋學指針 英學部』の主な書誌は次のとおりである。

【表1 『洋學指針 英學部』の主な書誌】

|         |   |
|---------|---|
| 著者      | 柳河春三（やながわ しゅんさん）  |
| 発刊      | 1867（慶応3）年  |
| 出版社（発兌） | 大和屋喜兵衛  |
| ページ数    | 24丁（序文1丁、本文22丁、著述目録1丁）<br>（1丁につき、オモテとウラがある。現代のページ立てで数えると、1丁オモテは1ページ目、1丁ウラは2ページ目に相当する）   |
| 体裁      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・約18.3cm（たて）×約12cm（よこ）（これは、B 6サイズ（18.2cm×12.8cm）とほぼ同じ）</li> <li>・厚み：約0.8cm</li> <li>・袋綴<sup>3)</sup>で、糸を通して綴じてある（本の右端に4カ所）。</li> <li>・右開き</li> </ul> |

なお、『洋學指針 英學部』には目次がないため、本稿の筆者は、本文（22丁）を以下のとおり、4つに分類してみた。

【表2 本稿筆者による分類】

| 分類項目                                   | 概要  |
|--|---|
| 文字の解説<br>(1丁オモテ～3丁ウラ)                  | 1) アルファベットの数<br>2) 大文字と小文字の区別<br>3) 字体の種類 (ローマ体、草体、イタリック体)<br>4) ff, fl, fi, æなどの合字の紹介  |
| 発音の解説<br>(4丁オモテ～13丁オモテ)                | 1) 子音と母音の存在 (母音と子音を表す文字の紹介)<br>2) 母音字の読み方とその例<br>3) 二重母音の説明<br>4) カナ表記に対する見解<br>5) カナ表記の工夫<br>6) 英単語例 (アルファベット1字～5字の単語例)          |
| 数字・通貨・分数の読み方の解説<br>(13丁ウラ～14丁ウラ)       | 1) 1から23<br>2) 30, 40, 50, 60, 70, 80, 90, 100, 200, 300, 1,000, 10,000, 100,000, 1,000,000<br>3) 分数<br>4) 通貨 (ドル, ポンド)<br>5) 百分率 |
| 大文字と句読点の使い方および品詞の解説<br>(15丁オモテ～22丁オモテ) | 1) 大文字の使い方<br>2) 句読法の説明<br>3) 品詞の説明 (名詞、動詞、形容詞、代名詞、副詞、前置詞、接続詞、感嘆詞)  |

『洋学指針 英学部』の書誌は以上のとおりである。次項では、カナ表記に関する先行研究を概観し、カナ表記に関する見解を「音節構造の観点」と「英語発話促進機能の観点」から整理する。

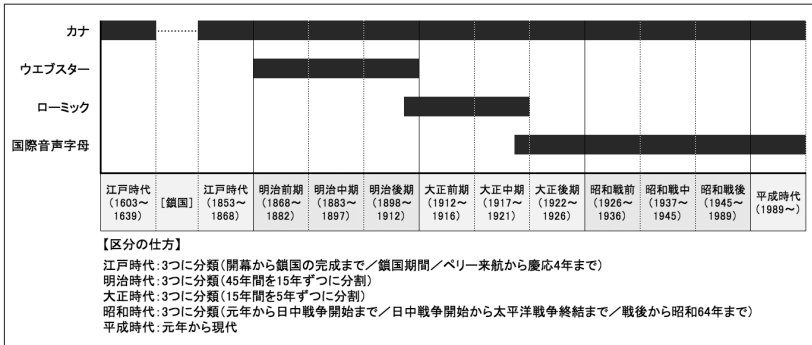
なお、本稿では、発音記号を記載する際、引用部分を除き、すべて [ ] に入れて表記することにする。カナ表記には「 」を用いる。

### 3. カナ表記に関する先行研究

#### (1) 日本における英語発音表記の変遷 (試案)

豊田 (1963 : 144-149)、田辺 (1987 : 37)、藤上 (2014b : 4-7)、早川 (2014 : 110-128)などを参考にして、本稿の筆者は、不十分ながらも、江戸時代から現代までの日本における英語発音表記の変遷 (試案)をまとめた。

【図1 日本における英語発音表記の変遷（試案）】



英語のカナ表記が始まったのは、調べた限りでは、1613年にJames Iの親書が徳川家康に渡された時のようである<sup>4)</sup>。そして、カナ表記は、江戸時代から現代まで廃れずに残っていることが図1から見て取れる。

他の表記方法について言えば、ウェブスター式は明治時代に人気を博したが、綴りに直接記号を付ける方式だったため、1音につき複数の表記方法があった。そして、大正時代に入ると、1符号1音のローミックが登場し、その簡便さゆえ、ウェブスター式の発音表記は姿を消した。ローミックはのちに、国際音声字母(IPA)に取って代わった。IPAも1符号1音であり、現代でも残っている。

## (2) 音節構造の観点

英語の音節構造には、「母音のみ」(たとえば、a [ə])あるいは「子音+母音」のペア(たとえば、bee [bi:])もあれば、「母音+子音」(たとえば、in [in])のペアもある。また、ten [ten] やbed [bed] のように「子音+母音+子音」もある。さらに、語頭に子音が最大3つ、語末に最大4つの子音が付くことが多くの先行研究で指摘されている(Catford 2004: 195-198, Celce-Murcia・Brinton・Goodwin 2004: 80-82、根間2004: 72-87など)。そして、鳥居・兼子(1993: 153)は英語学者のBohumil Trnkaの調

査結果を引用し、英語で最も多い音節構造が「子音（群）+母音+子音（群）」（84%）であることを示している。

したがって、調べた限りではあるが、音節構造の観点から、「母音」あるいは「子音+母音」を一文字で表すカナによって、英語音を表記することに無理があるという見解が、江戸時代の文献（本木1811など）にすでに書いてある。明治時代に入っても、この指摘は続く。たとえば、チャムブレン（1893：3）は「假名ヲ以テ英語ノ眞音ヲ寫サントスルモ到底隔靴ノ欺ヲ免レズ」とカナ表記に対して厳しい態度を示している。イーストレーキ（1905：3）も「英語ノ發音ヲ日本語ノ假名ニテ顯ハサントスルハ到底能ハザル所ナリ」とし、カナ表記は「初學者ノ發音ヲ毒スル<sup>（原文ママ）</sup>甚シト謂フベシ」と批判している。現代でも、他の先行研究でカナ表記は好ましくないとの見解はある（加賀谷1933：1、松本1960：3、長谷川1998：123など）。

### （3）英語発話促進機能の観点

限られた範囲であるが、英語発話促進機能の観点からカナ表記に関する先行研究を次の2つに大別してみたい。1つは、IPAの正確な読み取りには専門的な知識が必要であるから、現実的で、かつ、学習者の負担軽減に有効な手段はカナ表記であるとの見解である。静（1996：52）は、自身のカナ表記の利用に関する実証的な研究を踏まえて次のように述べている。

音声表記が、音声学者のためのものでなく、日本人学習者が音声の聴覚イメージを視覚的に把握するためのものである場合には、その表記の手段として国際音表文字（IPA）は明らかに望ましくない。IPAの正確な読み取りには専門的な知識が必要である。学習者が精密表記を読むことは不可能に近く、簡易表記は誤解を招きやすい。現実的でかつかなり有効と思われる代替手段はカタカナによる表記である。静（1996：52）

また、学習者の負担軽減についても、島岡（1997：62）は「発音記号自体がラテン文字を土台にしており、漢字混じりの日本語に慣れているEFL学習者にとっては綴り字だけでなく発音記号を覚えることは二重の学習負担」と指摘している。小菅（2003：85-86）も「発音記号は学習者に負担が大きすぎるとというのが、まず第一である。日本語とはまったく別の文字体系の外国語を学びつつ、それと似て非なる発音記号を併せて学ばせるのは、極めて限られた授業時数の中で、学習者をつまづかせる原因となる」と、発音記号まで覚えるのは学習者の負担になり、それが学習者のつまづきの原因になるとの見方まで示している。眞砂（2004：46）も「学習という観点からすれば、発音のための特殊記号の利用は、学習者の負担を増すことになる。学習者の負担と言語運用最低限度の基準を考えると、学習者の母語表記（文字）を使った表記システムの存在意義があると考えられる」と述べている。

もう1つは、日本語母語話者が外国語として英語を学習する際、カナ表記は、綴りと発音が必ずしも一致していない英語を自信を持って発音するきっかけになるとの意見である。島岡（2006：133）は多年に亘る音声学・音韻論およびカナ表記の研究と英語音声指導を通じて、「近似カナ表記で英語を表す試みをすれば、多くの学習者のコンプレックスを直し、より自信を与えることが出来るという実績を積み上げつつある」と述べている。大竹（2003：18）は近似的なカナ表記の一例として、島岡丘筑波大学名誉教授の近似カナ表記システムを取り上げ、「日本語という母語の干渉を避けられない日本人英語学習者が自信をもって英語の発音を習得でき、その結果、コミュニケーションの道具として英語を自由に気楽に駆使できるようになることを目指した提案である」と原音に近いカナ表記に一定の理解を示している。この近似的な表記方法は耳で発音を聞き覚えた幕末・明治初期のカナ表記（たとえば、いわゆる車夫英語のAmerican「メリケン」、gold「ゴウル」、Go another house.「ゴ・ナザ・ハオス」、What's the matter with you?「オス・マダ・ヨウ」など<『英語事始』1981：111>）

に通ずるところがあるように思える。

以上、「音節構造の観点」と「英語発話促進機能の観点」の2つの観点からカナ表記について先行研究を概観した。本稿では、前者を理解した上で、後者の立場に立つ。そして次項では、『洋學指針 英學部』におけるカナ表記の工夫を挙げてみる。

#### 4. 『洋學指針 英學部』に見られるカナ表記の工夫

『洋學指針 英學部』では、以下のとおり、カナ表記は文字に音を合わせる発音表記というよりも原音にできるだけ近づけようとする工夫が見てとれる。

##### (1) カナ2文字で1音として発音する（4丁ウラー5丁オモテ）

1) ティは「ティ」であって、「テイ」ではない。

例：eighty 「エイティ」、eighteen 「エイティーン」、tea 「ティー」

2) イュは「イユ」であって、「イユ」ではない。

例：young 「イユーンヅ」

3) [f] の発音は「フ」 「フ井（原文ママ）」 「フ」 「フエ」 「フ」

例：fine 「フイン」、fig 「フ井グ （原文ママ）」、if 「イフ」、fox 「フックス」

4) [v] の発音は「ヴァ」 「ヴ井（原文ママ）」 「ヴ」 「ヴェ」 「ヴ」

例：verb 「ヴェルブ」、five 「フワイヴ」

5) [w] の発音は「ウァ」 「ウ井（原文ママ）」 「ウ」 「ウエ」 「ウ」

例：wine 「ウワイン」、west 「ウエスト」、watch 「ウワッチ」

6) 「アウ」の発音は「オー」に近い音

例：all 「アウル」、law 「ラウ」

##### (2) [ŋ] は小さい「ヅ」で表す。（4丁ウラー5丁オモテ）

例：England 「インヅランド」、king 「キンヅ」、thing 「シンヅ」

##### (3) 母音の後の [r] は小さい「ル」で表す。（4丁ウラー5丁オモテ）

例：part 「パールト」やarm 「アルム」



## 5. 分析・考察

先に挙げたカナ表記の工夫を整理し、その工夫に対する分析・考察を試みる。

### (1) 分析

#### 1) カナ2文字で1音

[f] と [v] と [w] のいずれの音も、ウ段以外はカナ2文字で表記されている。特に、[w] のwine「ウワイン」や「ウワッチ」のように「ウッ」や「ウヅ」の表記は、[w] が円唇音であることを顕著に示している。

#### 2) 母音の後の [r]

『洋學指針 英學部』が出版された時代を考慮すると、柳河春三はアメリカ英語を意識しているのだと思われる。他の文献でも、この母音の後の [r] を微かに発音するとの解説付きで、カナ表記に工夫を凝らしている（たとえば、清水1860：4丁ウラは、ルの右横に縦棒を引いている「ル | 」。）。

#### 3) [ŋ] の表記

『洋學指針 英學部』では、「ンッ」である<sup>5)</sup>。つまり、単なる「ン」ではなく、音声的に [g] に影響された [ŋ] を示すため、「ンッ」と「ッ」を小さく書き添えている。

### (2) 考察

まず、柳河春三は「英ノ字音ハ假名ヲ以テ寫スノ甚難シ。是ハ英人我が邦語ヲ。彼ノ字ニ寫スノ難キモ。同一理ナリ」（4丁ウラ）とカナ表記に対する見解を示しながらも、「ティ」「イユ」「フッ」など、カナ2文字を使ってできるだけ英語の原音に近い表記を試みている。外国語としての英語の発話を促進する工夫であるように思われる。

次に、[ŋ] の表記の「ンッ」である。[n] が軟口蓋音 [g] の前に現れると、[n] が [g] の影響を受け、[ŋ] と発音される（逆行同化現象）。

Englandが「インッランド」と表記されるのはこのためである。なお、「ンッ」の表記はいまでも用いられている（島岡2013：123）。

さらに、福澤（1860）でも用いられている表記方法ではあるが、母音の後の[r]を「ル」と小さく表記して、直前の母音の一部であることを示す方法も特徴的である。なぜならば、フォニックスのルールによれば、arm [ɑ:rm]のように母音の後ろにr音字が現れる場合、[r]は母音にかぶさって一緒に[ɑ:r]と発音される（R音性母音）からである。端的に言えば、語頭あるいは「母音の前の[r]」の表記方法とは異なることを提示している。

最後に、[r]と[l]のカナ表記であるが、『洋學指針 英學部』では、両音とも「ラ」「リ」「ル」「レ」「ロ」で表記されており、表記上の区別はない。しかし、[r]は「Rハ<sup>マキジタ</sup>滾舌ノ声ニテ。日本ノラ<sup>マキ</sup>リルレロニ近シ」で、[l]は「舌ノ<sup>サキ</sup>頭ヲ長ク延ベテ呼ブ。稍ウニ近ク聞ユ」と解説していることから、表記上の区別はしていないが、発音上、両音は別々の音として発音されるべきであることを伝えていると考えられる。

なお、限られた範囲ではあるが、時代が下ると、両音を区別して表記する試みが見られる。たとえば、石川（1900：6、8）は、[l]を「ルァ」「ルィ」「ルゥ」「ルエ」「ルォ」と表記して、舌尖を上歯茎にしっかり付けることを示している。[r]については、「ラ」「リ」「ル」「レ」「ロ」である。菅野（1909）や堀（1984）は[l]をひらがなで、[r]をカタカナでそれぞれ表記している。竹中（1948：56）はこの逆の表記方法を用いている。

## 6. おわりに

### (1) 本研究のまとめ

先行研究を参照しながら、日本における英語発音表記の変遷（試案）を提示し、カナ表記が江戸時代から現代まで続いていることに触れた。

次に、カナ表記に関して音節構造の観点と英語発話促進機能の観点の両方から先行研究を概観した。音節構造の観点から、カナによって、英語音

を表記することに無理があるという見解が、江戸時代の文献にすでに書いてあることを指摘した。

一方、英語発話促進機能の観点からカナ表記に関する見解を2つに大別した。1つはIPAの正確な読み取りには専門的な知識が必要であるから、現実的で、かつ、学習者の負担軽減に有効な手段はカナ表記であるとの見解である。そして、もう1つは、日本語母語話者が外国語として英語を学習する際、カナ表記は、綴りと発音が必ずしも一致していない英語を自信を持って発音するきっかけになるとの見解である。

本稿では、音節構造の観点からの見解を理解した上で、英語発話促進機能の観点から『洋學指針 英學部』のカナ表記の工夫を調査した。その結果、カナを2文字使ってできるだけ原音に近い表記を試みていることと（[f] [v] [w]などの音）、[ŋ]や母音の後の[r]を小さく表記した工夫を指摘した。

## (2) 今後の課題

今後も、幕末・明治初期の英学書における英語の発音表記について研究を続けていくが、ダラス著、吉尾和一訳『英音論』、尺振八、須藤時一郎著『傍訓 英語韻礎』（以上、1872）の発音表記やその解説を調査する。いずれも明治時代初期の発音に関する英学書としては避けて通ることができないからである。そして、その結果もまた現代の英語音声教育への示唆を試みるための研究データとしたい。

## 引用文献

- イーストレーキ、F. W. (1905) 『英語一般之誤用』 東京：金刺芳流堂。  
石川辰之助編 (1900) 『通俗百科全書第十編 通俗英語案内』 東京：博文館。  
大竹芳夫 (2003) 「国際通用語としての英語の音声と文法指導の在り方」『信州大学教育学部紀要』 109 長野：信州大学教育学部。  
尾佐竹猛 (1940) 『新聞雑誌の創始者柳河春三』 東京：高山書院。  
加賀谷林之助 (1933) 『早く覚える英語の繪解き』 東京：昇龍堂書店。

- 菅野真 (1909) 『カンノ式速成日英會話』 東京：成功堂。
- 小菅和也 (2003) 「英語発音カタカナ表記の活用」『武蔵野英米文学』VOL. 36 東京：武蔵野大学英文学会。
- 金地院崇伝、異国日記刊行会 編集 (1989) 『影印本 異国日記—金地院崇伝外交文書集成—』 東京：東京美術。
- 斎藤多喜夫 (2017) 『横浜もののはじめ物語』 横浜：有隣堂。
- 静哲人 (1996) 「自然な速度の発話を聴取する能力を伸張するためのカタカナ表記利用に関する実証的研究」『研究紀要』32 福島：福島工業高等専門学校。
- 島岡丘 (1997) 「島岡式カナ表記の定着と活用—英語教育の新しいシステム化に向けて—」『茨城キリスト教大学紀要』第31号 茨城：茨城キリスト教大学紀要編集委員会。
- (2006) 「不可欠な技法—英語発音習得のための発音記号とカタカナ表記」『聖徳の教え育む技法』第1号 千葉：聖徳大学企画委員会第2分科会。
- 島岡良衣 (2013) 『日本語で覚えるネイティブの英語発音—3週間であなただの英語が見違える島岡メソッド』(島岡丘監修) 東京：ダイヤモンド社。
- 清水卯三郎撰 (1860) 『ゑんぎり志ことば』 出版社不明。
- 杉本つとむ (1985) 『日本英語文化史資料』 東京：八坂書房。
- 尺振八、須藤時一郎 (1872) 『傍訓 英語韻礎』 東京：共立学舎。
- 高木誠一郎 (1987) 「資料：日本における英語音声学文献総覧 (改訂) (文化8年・1811—昭和61年・1986)」『英学史研究』1988巻 (1987) 20号 東京：日本英学史学会。
- 竹中治郎 (1948) 『やさしい・くはしい英語の発音』 東京：泰文堂。
- 竹村覺 (1933) 『日本英學發達史』 東京：研究社。
- 田辺洋二 (1987) 「発音記号の日本への移入史」『日本英語教育史研究』第2号 東京：日本英語教育史研究会。
- グラス、C. H. 西尾和一訳 (1872) 『英音論』 尚古堂。
- チャムブレ、B. H. (1893) 『チャムブレ英文典』 東京：共益商社書店。
- 手島良 (2011) 「日本の中学校・高等学校における英語の音声教育について」『音声研究』第15巻第1号 東京：日本音声学会。
- 鳥居次好、兼子尚道 (1993) 『英語発音の指導』第19版 東京：大修館書店。
- 豊田實 (1963) 『新訂 日本英學史の研究』 東京：千城書房。
- 根間弘海 (2004) 『英語の発音とリズム—理論と演習の英語音声学』 東京：開拓社。
- 長谷川博 (1998) 「外国語をカタカナ表記する弊害」『研究論集』第68号 大阪：関西外国語大学／関西外国語大学短期大学部。
- 早川勇 (2014) 『英語辞書と格闘した日本人』 東京：テクネ。
- 福澤諭吉 (1860) 『増訂華英通語』 快堂蔵板。
- 藤上隆治 (2014a) 「『實用英會話の秘訣』の発音表記に関する一考察—カナ表記でどこまで英語音に近づけたのか—」『FLCジャーナル』第9号 実践女子大学外国語教育研究センター。
- (2014b) 「英語発音のカナ表記を再考するための基礎的研究—表記の変遷とカナ表記に関する是非論をめぐって—」『英語学・英語教育研究』第19巻33号 東京：日本英語教育英学会。
- (2015) 「異言語教育における母語の活用—カナ表記による認知的な英語音声指導を見

- 据えて一』『日本の言語教育を問い直す―8つの異論をめぐって―』東京：三省堂。  
堀英四郎（1984）『新訂 初めて学ぶ人の英語会話』東京：大修館書店。  
眞砂薫（2004）「表音法と言語学的説明―英語教育の改善へのステップ―」『近畿大学語学教育部紀要』第3巻第2号 東大阪：近畿大学語学教育部。  
松本亨（1960）『実用英語への道』東京：英友社。  
本木正榮（1811）『諳厄利亜興学小筈』（1982年、日本英学史料刊行会編、大修館書店）。  
八杉貞利（1901）『外國語教授法』東京：寶永館。  
柳河春三（1867）『洋學指針 英學部』江戸：大和屋喜兵衛。

- Catford, J. C. (2004) : *A Practical Introduction to Phonetics, second edition*, Oxford: Oxford University Press.  
Celce-Murcia, T., Brinton, D. & Goodwin, J. (2004) : *TEACHING PRONUNCIATION: A Reference for Teachers of English to Speakers of Other Languages*, Cambridge: Cambridge University Press.

## 引用ウェブサイト

『和書のさまざま―国文学研究資料館通常展示図録（2018年版）―』東京：国文学研究資料館。（[https://kokubunken.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=3738&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=21](https://kokubunken.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=3738&item_no=1&page_id=13&block_id=21)より2019年3月31日、PDFをダウンロード。）

## 注釈

- 1) 明治維新史、明治文化史、日本憲政史の研究者である尾佐竹（1940：1-5）によると、柳河春三は1850（嘉永3）年、蘭学の先達であった上田帯刀のために『西洋砲術便覧』を著すなど、語学のみならず、写真技術、西洋の算術など、執筆や校閲の分野も多岐にわたっている。柳河春三はまた、1867（慶応3）年、36歳にして、日本初の雑誌『西洋雑誌』（月刊誌）を創刊（1869<明治2>年まで出版）した。
- 2) 高木（1987：188）は、「Websterの*The Elementary Spelling Book* とかなり一致するところがある」と、*The Elementary Spelling Book* が、『洋學指針 英學部』の底本である可能性を指摘している。しかし、本稿ではカナ表記に焦点を当てており、底本の可能性には言及しない。
- 3) 「紙を二つ折りにして重ね、折り目と反対側の端を糸や紙 縫などで綴じたもの」（『和書のさまざま―国文学研究資料館通常展示図録（2018年版）―』東京：国文学研究資料館より）。
- 4) 外国人の拝謁や外国からの親書・それに対する返書などが記載されている『異国日記』（金地院崇伝著。本稿筆者が見たのは、1989年発行『影印本 異国日記―金地院崇伝外交文書集成―』異国日記刊行会（編））を見ると、その親書の本文について

ては「文言ハ南蠻字ニテ不被讀故、アンジニ假名ニカカセ候」とある（アンジとはイギリス人で日本に漂着後、家康に登用されたウイリアム・アダムズ〈三浦按針〉を指す）。その親書の中に地名や人名の発音がカナ表記されている。

- 5) ただし、10丁ウラにあるingには「イン」というカナ表記もあり、表記のゆれが見られる。